

ACLSニュース

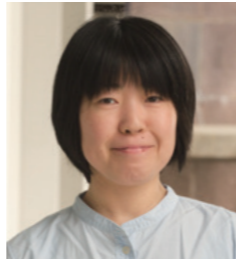
- プログラム担当者である杉山将准教授(情報理工学研究科)が、科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞を受賞しました。(業績名:ビッグデータ時代を支える次世代機械学習技術の先駆的研究)
- プログラムコーディネーターである山村雅幸教授(総合理工学研究科)を代表とするグループ(山村雅幸教授、木賀大介准教授ほか)が、第18回工学教育賞の業績部門を受賞しました。(標題:国際学生コンテストを通じた多分野共同型の次世代生物工学教育)
- プログラム担当者である鈴木崇之准教授(生命理工学研究科)に第54回(平成25年度)東レ科学技術研究助成が決定しました。(研究題目:中枢シナプスの可塑性を制御する分子病理メカニズムの解明)
- プログラム担当者である伊藤武彦教授(生命理工学研究科)が平成24年度東工大教育賞 優秀賞を受賞しました。伊藤教授はグループ型問題解決演習 WG 委員長として、グループ型問題解決演習第二の企画を担当しており、暗記科目からの脱却を図った東工大に相応しい生命科目の教育実績が優れているとして認められました。
- 5月2日(金)「ACLS 春の交流会」を開催しました。4月から新たに当プログラムに加わった課程参加学生やプログラム担当者を迎え、楽しい催しとなりました。
- 5月17日(土)～18日(日) すすかけ祭にて今年も模擬店(すいとん、わたあめなど)を出店しました。たくさんの方にご来店いただきました。

人事異動

採用		
H26.4.1	特任助教	松崎由理
退職		
H26.3.31	特任准教授	永田裕一 (異動先:徳島大学知能情報工学科准教授)
H26.3.31	特任准教授	緒方博之 (異動先:京都大学化学研究所教授)
H26.3.31	特任准教授	Melinda Hull

新規採用教員の紹介

細菌の環境応答のシミュレーションや、タンパク質-タンパク質ドッキング計算による相互作用ネットワーク予測の研究を行ってきました。身近な生き物をじっくり見るのが好きです。学生が人間性、専門性ともに大きく成長する時期に居合わせられるのは喜びです。教育・研究とも粘り強く取り組めます。よろしくお願ひします。



松崎由理 特任助教
(専門:システム生物学)

～永田先生、緒方先生からメッセージが届きました～



永田裕一(徳島大学)

4月1日付で徳島大学に異動しました。私は ACLS が本格稼働し始めた年から2年間、特任准教授として ACLS にお世話になりました。この間、特に夏の学校の準備や情報系科目の講義などでは、ACLS に所属している学生と多く関わることができました。ACLS では今後の大学院教育の先駆けとなるようなさまざまな教育の取り組みがなされています。これらの教育体制を築いていくことの難しさや面白さを身をもって体験することができたことは、教育者として非常に良い経験になりました。5年間の教育課程を修了して、みなさんがどのように活躍していくのか楽しみにしています。



緒方博之(京都大学)

教職員の中には、学生のみさんのことをうらやましく思っている人がいます。教育院でのカリキュラムや企画は、私の世代が若い時にまさに必要としていたことの実現です。でも、事をなす上で重要なことは、「夢」を持つことです。私の夢は、生命の進化を理解することです。夢以外の多くは、経験や教訓が教えてくれ、周囲の協力も得られます。今、技術的なことを身に付け、そして夢の追求に人生をかけてください。教育院の皆様方には在籍中、公私にわたり大変お世話になりました。厚くお礼を申し上げます。現在、京都大学化学研究所にて仕事を続けております。京都にお越しの際は、お声をかけていただければ幸甚の至りでございます。

編集後記

今号では学生のみさんの成長や活躍をご紹介させていただきました。しかしこれはほんのごく一部に過ぎません。毎日のように学生・教員の嬉しいニュースが飛び込んできます。次号はどれにしよう、ニュースレター担当者としてこれほど嬉しい悩みはありません。(YK)



ACLS News Letter 第6号(2014年6月2日発行)

東京工業大学 情報生命博士教育院
(文部科学省 平成23年度「博士課程教育リーディングプログラム」採択)
すすかけ台事務室
〒226-8501 神奈川県横浜市緑区長津田町4259, J3-141 (J3棟407号室)
Tel:045-924-5827 Fax:045-924-5930
office@acsls.titech.ac.jp http://www.acsls.titech.ac.jp/

ACLS News Letter

東京工業大学 情報生命博士教育院
Education Academy of Computational Life Sciences (ACLS)
(文部科学省 平成23年度「博士課程教育リーディングプログラム」採択)

contents

- 1—巻頭言～日本から飛び出せ!
- 2-3—学生の活躍大特集
- 3—教員の活動紹介
- 4—ACLSニュース、人事異動、教員メッセージ



vol.06
2014.6

巻頭言 ～日本から飛び出せ!



梶原 将
情報生命博士教育院
キャリアパス形成・海外派遣部会 部会長
広報部会 部会長
生命理工学研究科 教授

ACLSの学生諸君、みなさんは一人で他国を訪れたことはありますか?

私が初めて一人で他国の空港に降り立ったとき、周りには日本語の掲示は見当たらず、日本語を話せる人も一人もなく、大変不安になったことを覚えています。そんな中でも入国審査を受け、下手な英語で現地の人に聞いてバス停を探し、予約していたホテルに辿り着きました。その後もホテルから目的地までのバスや汽車の経路を聞いたり、スーパーやレストランで注文したりする際にはかなり苦労しました。ただ、当時の現地の人々は、私のような外国人には大変親切であったので助かりました。そうして暫く他国で過ごしているとなんとなく自分一人でも暮らし

ていけるのではないかと思うようになり、また現地の人々の暮らしや日本との文化の違いなどを知るにつれて、どんどんその国の興味が湧いてきました。そのような経験が、その後、私が海外に長期間滞在する理由の一つとなったと感じています。最近でも英語圏以外の国に初めて一人で訪問した際、ふと気が付くと周りには日本語だけでなく英語すら分かる人は少なく、周囲の掲示も全て現地語で何を書いているのか全く分からない状況で、ここで車から降り出されたら、無事日本に帰れるだろうかと思うこともあります。でもそのような環境でも現地の人と何とか意思疎通はできるものですし、現地語を少しでも覚え、色々なことが少しずつ理解できるようになると、その国への興味が出てきて、益々関心が高くなります。

みなさんが活躍する21世紀のグローバルな実社会では国境はありません。将来、みなさんが企業人や社会人となると、その研究者・技術者としての能力を欲している国や地域で、自身の能力を最大限に引き出すことが求められます。そのためには、研究力は無論のこと、その国や地域の人々を理解し、彼らの現状や歴史・文化・習慣を知ることが重要な要素の一つです。もちろん、国際的な共通語とされる英語、特に現地の人々と何とか意思疎通ができる程度の英語は必須ですし、英語圏以外では現地語も少し

は話せる方がより親しみを感じてくれます。最近のグローバルな社会では、世界で活躍するインテリジェンスな人々は最低三か国語を話すのが当たり前、とされています。

このような世界的な流れにおいて、ACLSでは、専門的な研究力を強化する取組みとは別に、英会話等を中心としたグローバルコミュニケーション、グローバルプレゼンテーション等のネイティブスピーカーによる少人数クラスを設け、生きた英語力を向上させる取り組みを行っています。そして、海外インターンシップという必修科目では、研究や語学力の向上だけでなく、社会人としての海外滞在を体験させるために、学生それぞれが自らの活力で、海外の訪問先を探して交渉し、一人で3カ月間以上の留学を行うことを推奨しています。研究が大変忙しかったり、なかなか訪問先が見つからなかったりする学生には、ACLSで構築した留学プログラムや幾つかの訪問先の紹介なども行っていますが、まずは自らの達成目標を定め、それに見合った訪問先を見つけ、海外留学を計画してみてください。

みなさんは希望すれば、世界のどこへでも ACLS の旅費のサポート付きで留学できるのです。ACLS に所属できたみなさん、是非このような授業や研修を大いに活用し、学生時代に自身の能力を多方面で伸ばしましょう。

学生の活躍大特集

「情報生命海外インターンシップ」体験記 田胡信広 (生命理工学研究科 D2)



みなさん初めまして。分子生命科学専攻関根研究室博士課程2年の田胡信広です。私はこの3月に1年間の海外インターンシップを終え、東工大に戻ってきました。まず初めにこの留学を支えてくださったACLSの方々、関根先生、清尾先生、大窪先生に深く御礼申し上げます。今回はこの場をお借りし、私の留学体験談を紹介させていただきます。

私の専門は、生物有機化学、特に人工核酸の有機合成です。留学先はカナダのMcGill大学化学学部です。McGill大学はケベック州モントリオールのど真ん中に位置しています。ケベック州はカナダで唯一

のフランス語公用語圏です。みんなフランス語を話しますが、McGill大学は英語系大学なのでフランス語を話さなくても問題なく研究ができました。生活面でもモントリオールに住む人はバイリンガルなので、まるで問題はありませんでした。留学前の私が持っていたカナダのイメージは“寒い”と“紅葉”でした。それは留学後も変わっていません。気温は夏に最高30℃ちょっと、冬にはマイナス30℃くらいまで下がります。そんな生活環境での研究は過酷かと思いきや、室内は常に適温に調整されているのでとても快適でした。

カナダの大学、研究室について特に強く感じたことは、カナダでは学生と教職員の間の垣根が低いこと、学生が主体的に大学に関わっているということでした。学生はみな独自の意見を持ち、遠慮することなく教授とディスカッションをしていま

した。教授も学生とのコミュニケーションを大事にし、研究の話以外でも様々な話題をともに話し合っていました。大学には毎週招待講演があり、隔週で朝食会があり、季節ごとにイベントがあります。大学院生が主体となって企画運営しているイベントもたくさんありました。その度に学生と教職員の間で、時には音楽とお酒を交わしながら、様々な話題があがります。そのような環境での研究はとても刺激的で、視野が広がるものでした。まだまだ書きたいことはありますが、続きは別の機会にお酒でも飲みながらお話しすることにしたいと思います。ありがとうございました。



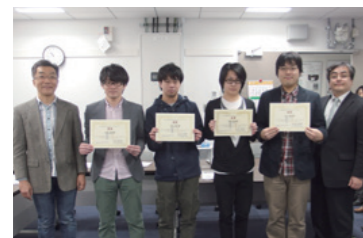
田胡さん(左から3人目)とダムハ研究室のみなさん

「第一回情報生命博士教育院プロポーザルコンクール」結果発表

山村雅幸 (情報生命博士教育院 情報コーディネーター・総合理工学研究科 教授)

このコンクールは、自分のやりたいことを、予備知識の有無さえわからない匿名の相手に対して適切にアピールするプロポーザルスキルの向上を目的としています。学振DC1、DC2、PDをモデルとしてスタートしました。平成25年5月7日締切時点での応募は6名。斬新性、計画性、将来性

の3項目を4段階で採点して総合評価にまとめました。結果、PD部門金賞に大上さん、DC部門金賞に矢野さん、同銀賞に松原さん、早川さんが選ばれました。ちなみにこのうち2名が学振DC、PDを獲得。コンクールは今後も実施します。みなさまふるってご応募ください。



PD部門金賞 大上雅史 (情報理工学研究科 当時 D3)
DC部門金賞 矢野雅大 (生命理工学研究科 当時 M2)
DC部門銀賞 松原惇高 (生命理工学研究科 当時 M2)
DC部門銀賞 早川雅之 (総合理工学研究科 当時 M2)

表彰式にて記念撮影 平成26年3月17日(月)
(左から、山村教授、松原さん、早川さん、矢野さん、大上さん、秋山教授)

速報 夏の学校2014 学生実行委員会 スタートしました

水口佳紀 (生命理工学研究科 M2) 学生実行委員会 委員長

今年度の「国際夏の学校」は8月13日から19日にかけて米バドュー大学で開催致します。それに向け、学生実行委員会を5名の学生有志で結成しました。現在多くの議論を重ねています。みなさん期待しててください。



学生実行委員会のメンバー(左から、外館さん、大塚さん、水口さん、安田さん、星賀さん)

「学生主導型学際連携リーダー育成企画」の開催

矢野雅大 (生命理工学研究科 D1)

今回「学生主導型学際連携リーダー育成企画」を立ち上げさせていただいた矢野です。本企画は「異なる分野や大学の間での交流を、もっと実際の研究として結実させる」という目標のもと、大阪大学の超域イノベーション博士課程プログラム(以下「超域」)の学生と共同企画した交流プログラムです。ACLSからは私のほかにチャレンジ精神あふれる伊藤優さん、秋川元宏さん、水口佳紀さんの3名が参加しました。

本企画は学生がゼロから立ち上げまし

た。企画を無事成功させるために、超域の学生および教職員、ACLSの秋山先生を初めとした多くのみなさんとの情報の確認や共有が必要でした。その過程で多くの失敗や発見があり、「用意された企画」では得られない濃密な経験を積むことができました。当日は参加した学生各自の研究紹介と、それを踏まえたワークショップ(デザイン思考を用いることで、異なる分野の連携を促進するために有効なソリューションを実際に設計してみる)、そしてイノベーションを起こすための環境の現状

についての学習を行いました。これらの企画を通じ、超域とACLSの特徴が明らかになりました。今後はそれぞれの長所を活かして、より一層の努力が必要であると、各自の「兜の緒を締める」ことができたと思います。

企画が終わった後も両大学の学生間で共同研究の話が持ち上がり、当初の目標が達成できたと思います。今後も学生発の企画が立ち上がり続けることで、学生が自ら経験を蓄積できるような素晴らしいACLSであればと思います。



企画説明をする矢野さん(左)、グループワークの様子(右上)、平成26年3月1日(土)～3日(月)・大阪大学吹田キャンパスにて(右下)



本企画の三つの目的

- ①イノベーションの発生を促進させる方法を探り、その実現を具体的なモノとしてのレベルまで構想する
- ②第一の目的の成果を踏まえて、実際に共同研究や共同企画を巻き起こしていく
- ③学生が役割を果たす場面を可能な限り多く確保することで、異なる分野や組織を横断して企画を立案し実行する能力を鍛える

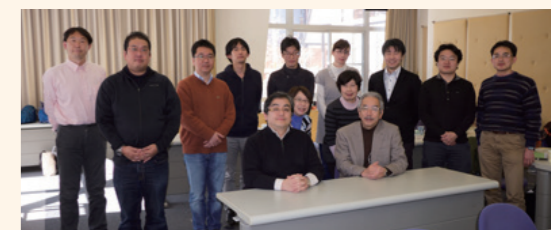


教員の活動紹介 小西史一 情報生命博士教育院 特任准教授 平成25年度「情報生命博士教育院」FD研修合宿 教員レポート

ACLSでは、3研究科で構成されるプログラム担当教員の情報共有と複合領域型の人材育成に関する研鑽を積むため、定期的にFD研修を実施しています。昨年度は、八ヶ岳高原にあるセミナーハウスにて、24名の教職員が研修に参加しました。期間中は、昼夜を共に過ごし、ガンマ型教員奨励プロジェクトや夏の学校などの報告のほか、プロジェクトの長期的展開などを熱く議論しました。その中でも今回は教員グループワークをご紹介します。

「ACLSが抱える問題点と解決策」という課題について、「デザイン思考」を取り入れてグループワークに挑戦しました。問題意識を共有し、協力して解決案を探り、新しいアイデアを創造する、この一連のプ

ロセスを教員も体感し、相手の思考だけでなく問題の認知・解決手法などの興味深い過程を肌で感じることもできました。ふだんは学生の演習グループワークを指導する身ですが、逆の立場での経験を得ることができ、実りの多い時間となりました。私のグループの最終プレゼンテーションでは「リアル問題解決演習第三」の提案をしました。学生の人間力と問題解決能力を「イレギュラーな事象を意図的に起こす」ことで鍛えるトレーニング演習課題です。総じて評判も良く、現在の学生演習の拡張した姿を考える良い機会になったと考えています。教員だって、努力を惜しんではいられない、そんなことを改めて感じる良いFD研修になりました。



「ネオオリエンタルリゾート 八ヶ岳高原」内セミナーハウスにて平成26年3月10日(月)～11日(火)



活動報告や今後の課題について議論



教員もグループワークに挑戦